

第1回近畿圏広域地方計画有識者会議の主な意見

1. 計画全体について

- ・ 骨子（素案）は、バランスよく網羅的に整理されているが、各地域ごとに進めるものと、圏域全体でまとまって進めていくべきものとに整理してはどうか。それが繋がって1つのストーリーになるような計画になるとよいのではないか。
- ・ 成長エンジンとなる新たな産業の創出は、関西の文化、人材育成、観光などと、無関係にできるものでもない。施策・取組が、縦割りとならないよう、全体として近畿圏の成長力を加速していくような総合的な計画になるとよい。
- ・ 戦略の項目に戦術レベルの事項が記載されており、中間とりまとめに向けて、事業実施主体の関わり方も想定して、ある戦略のためにこの戦術をとるといったことが読んだ人にわかるように整理していく必要がある。

2. 計画策定に向けての視点について

- ・ 何らかの不測の事態が生じた場合に食料が供給できるかという観点から、「食料自給力」が政策目標に加わってきている。この計画にも食料自給力の観点を加えられたい。
- ・ 南海トラフ巨大地震をとり上げているのは良いが、近畿にはM7以上の地震を発生させる活断層が20程度あり、そのどれが動くかは誰にもわからない。災害については、決め打ちしてはならず、満遍なく目配りされるような計画にすべき。
- ・ このような計画がこれまでなぜうまく実現しないのかを考えると、行政の想定どおり企業が行動するとは限らないことが挙げられる。ただ、企業活動がうまく展開していく土俵づくりをするのは、このような計画の重要な役割なので、土俵づくりの具体策なり、プロセスを明確にしていく必要がある。
- ・ 老朽化というのは、単に構造物施設が年をとるということではなく、日常の安心・安全を脅かすばかりか、歴史ある文化、伝統をも脅かすもの。例外なく全ての施設で今も着実に進行しているにもかかわらず、骨子（素案）の記載ぶりでは、危機意識が希薄すぎる。
- ・ 中山間地が抱えている一番大きな問題は、高齢者も減り始めていることで、ある意味、年金や介護保険に依存してきた地域の医療、福祉等が土台から崩れつつある。そういう視点も取り込んでもらいたい。

3. 目指す姿について

- ・関西らしさという点について言えば、
 - ①大阪、京都、神戸の3つの都市が、お互い競い合って、かつ補完しながら発展していくという姿ではないか。
 - ②人の多様性、地域の多様性ではないか。「多様性」をキーワードにして検討してみてもどうか。
 - ③歴史・文化資産が集積し日本一のコンテンツを誇るのが関西だが、歴史・文化に片寄らず、笑いの文化やもっと広く人の温かみなど、より幅広く、多様に関西の魅力をとらえてはどうか。
- ・関西は観光資源、あるいはその背景にある自然や生活文化、歴史、全てにおいて最高峰を形成していると言って過言ではなかろう。ホスピタリティも非常に高い。アジアの観光文化の中心を目指してもらいたい。

4. 戦略について

- ・医療などを中心とした知の集積とあるが、例えばハーバード大学の年間予算は約5000億円、バイオサイエンスの研究者も約5000人。関西の大学や研究機関を合わせてもハーバード大学1校に勝てない、そういうグローバルな視点で評価すべきではないか。頑張ればなんとかかなるという考え方は良くない。頑張るもの、切るものがあり、切らなければならないものを持ち続けていることにも問題があるのではないか。
- ・観光では、「住みたい所が行きたい所」。その「住みたい所」が関西で徐々に減ってきているのではないか、周辺地域の人口減少で住みにくいところが増えていることは大きな問題ではないか。
- ・新しいものを何か考え、生み出す力が関西らしさだと思うが、そういったものが最近出ていないことが、関西の停滞感の一因ではないか。何か新しいことをやろうとすると、東京ではすぐにお金が集まるが、関西では集まらないう。関西は新しいものを生み出すシステムが弱くなってきているのではないか。そういうものの強化がないと、例えば、研究者のアイデア、発見どまりで、新しいものは生まれない。
- ・関西は、国の助けをあまり借りず、地元の力で、道路、橋、鉄道などをつくってきたと学んだ。その結果、繋がってはいるものの便利さの点で少々問題をきたしている、というのが現状ではないか。関西の魅力を活かそうとする施策が、表面的ではない、実質的な、もう一歩二歩と踏み込んだものとなるよう、これまで現場の人たちがいろいろ工夫して実現する力、それをもっと上手く活かすような仕掛けを公共の側は考えていく必要がある。
- ・現時点ではグローバルな競争力では完全に劣後しているかもしれないが、PMDA((独)医薬品医療機器総合機構)やAMED((独)日本医療研究開発機構)も設立され、再生医

療など関西に強みのある分野で、基礎研究から新薬の開発まで一貫通貫にできて、それが世界最速となれば、シンガポールの金融センターのようなものが関西にもできる可能性はあるのではないか。

- ・ 関西のインフラの強みは、24時間空港があること、日本海と太平洋の2面を有していることが挙げられ、この強みを活かしてアジアの成長をいかに取り込んでいけるかが重要。リニア新幹線についても、例えば、東海道新幹線の複々線化という整理ができれば、特々法(特定都市鉄道整備促進特別措置法)による特々事業のように、新幹線利用者に上乗せ運賃を負担してもらい、建設費や減価償却に充てる仕組みで、遅れる18年を半減できるのではないか。
- ・ 最大降雨や洪水がどのようになるか、が予測できるような学術、技術が徐々に進んできているので、この計画で、それを取り込んだハード対策、ソフト対策がとれるような位置づけを与えてもらいたい。
- ・ 歴史・文化をクローズアップすることは重要だが、今までそれが続いてきて、現在もそれが生きているということ、そのことが評価されるべきだろう。幅広に、現代文化も取り上げてもらいたい。また日常的な我々の生活が生み出していくような文化や現代的技術、歴史が育んできた美しい風景の保全についても取り上げてもらいたい。風景が美しい、環境が美しいというのは、利便性と並んで住むところを選ぶ重要なファクターだと思う。
- ・ 関西の閉塞感を払拭するためには、関西の強みを更にどう強化するか、弱点をどう補強するかがあるが、前者について言えば、東京に対して、歴史と伝統は圧倒的に強い。歴史と伝統をもとに、人を集め、賑わいづくりに繋げ、外国からも人を呼び寄せる、人も育てるというようなことをうまく連携させて、お金にかえて、食文化、おもてなしの文化を含め、奥深い伝統文化まで、文化を育てていけばよいのではないか。
- ・ 伝統があるが故にその成功体験に引きずられ、制度・仕組みあるいは産業風土が硬直化してしまうことを、「負のロックイン」という。今の関西が、それに陥ってないか。起業や、海外企業の関西進出が少なく、新しいものが入ってきていない。ここを如何に突破していくかだが、キーとなるのは元気な中小・中堅企業と如何に連動していくか、アジアとの関係をどう作っていくかだと思われる。
- ・ これからは、ますます情報も知識も必要な社会になっていくのに、日本の大学では学部卒が大半で、大学院生はごく小さい比率でしかない。その原因は大学院卒が社会で使いにくいとされ、就職が難しい、入り口で閉め出されてしまうからだが、その結果、知的レベルが下がっており、いろいろなところにその現象が現れていると思う。体験・経験で強くなるような社会はダメだと、それを関西から発信していく必要がある。また東京の企業が関西で採用活動を強化しており、優秀な関西の大学生も就職で東京に吸い寄せられる流れになってきていることを、深刻に考えるべきだ。
- ・ インドも入れると、アジアは人口が世界の半分以上、10年後にはGDPも世界の半分以上

上になる。アジアを中心に据えるということは大きな世界戦略でもある。世界経済的に見ても、製造業の中心はアジアに集まってきており、そのほとんどはチャイナ＋１の大きなサプライチェーンの中に組み込まれてきているので、中小中堅企業のグローバルニッチの技術革新とは、ある意味これを強化していること、と理解しておく必要がある。またASEANは人口が多く、マーケット・インの発想、サービス・ドミナント・ロジックの考え方に依拠して、企業活動を行えば、中小・中堅企業にも活躍の場が開かれると思われる。そういう意味での知識の底上げ、機運の盛り上げがなされることを期待したい。

- ・食料自給力を将来にわたって担保するためには、それを担う人間にノウハウを伝授していかなければならないが、そのためにも養父市だけでなく関西全体で法人化のうねりを大きくして、同時に農業を輸出産業化していくことが重要ではないか。

5. 計画の実現に向けて

- ・計画策定後、計画がどのように展開されるのかを考えると、各府県を含む行政の理解がないと進まないと思うので、連携がうまくとれるような計画にすべき。また緊急を要するものと、時間をかけながら進めていくものと、整理しておくことが必要である。

※第１回近畿圏広域地方計画有識者会議で有識者からいただいたご意見については、一部骨子（案）に反映したが、さらに玩味検討し、近畿圏広域地方計画中間とりまとめ（案）の作成過程で反映させていく。